

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

掇57
84

褚河南·行書千文

版社文典

始



千字文

勅負外散騎侍郎周興嗣次韵

天地玄黃宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張
寒來暑往秋收冬藏閏餘成歲律呂調陽
雲騰致雨露結為霜金生麗厓水玉出

千字文

勅負外散驪 侍郎周興嗣次韵

天地

玄黄宇宙茫茫日月盈昃辰宿列

張寒來暑往秋收冬藏閏餘成歲律呂

調陽雲騰致雨露結為霜金生麗水玉出



崑岡劍薙巨闢珠稱夜光果珍李杲菜
重芬薰海賦河澹鱗潛羽翔龍師火帝
鳥官人皇始制文字乃服衣裳推位讓國
有虞陶唐吊民伐罪周發商湯坐朝問
道垂拱平章愛育黎首臣伏戎羌遐

迹壹體率賓歸王鳴鳳在樹白駒食
場化被草木賴及萬方蓋此身髮四大
五常恭惟鞠養豈敢毀傷女慕貞潔
男効才良知過必改得能莫忘罔談彼
靡恃已長信使可覆罍欲難量墨悲絲

染詩讚羔羊景行維賢勉念作聖德
名立形端表正空谷傳聲虛堂習聽
同惡積福緣善慶尺璧非寶寸陰是競
資父事君曰嚴与敬孝當竭力忠則
盡命臨深履薄夙興溫清似蘭斯

馨如松之盛川流不息澗澄東映容心
若思言辭安寔篤初誠美慎終宜令榮
業所基藉甚無竟學優登仕攝職
從政存以甘棠去而益訊樂殊貴賤禮
別尊卑上和和睦夫唱婦隨外受傳訊

入奉母儀諸姑伯姊猶子比兒孔懷兄弟
同氣連枝交友投分切磨箴規仁慈隱
惻造次弗離節義廉退顛沛匪衢性
靜情逸心動神疲守真志滿逐物意
移堅持雅操好爵自縻都邑平夏東

西二京背印面洛浮渭據汪宮殿照以樹影
樓觀飛鷲畫寫禽獸画彩仙靈丙午
傍啓甲帳對楹肆筵設席鼓瑟吹笙
升階納陛矣轉疑星右通廣內左達承
明既集墳典亦聚羣英杜稿鍾繇漆

書壁經府羅將相路夾槐御戶封八縣
家給千兵高冠陪犖車駟轂振纓世祿多
富車駕肥輕榮功茂寶勒碑刻銘礎
溪伊尹佐時阿衡奄宅曲阜繼旦孰營
桓公唯合濟弱扶傾綺回漢惠說感武丁

俊又密勿多士寔寧晉楚更霸趙魏
困橫假途瀟蕪踐土會盟何遵約法禁
弊煩刑起翦頰牧用軍小眾精宣咸沙漠
馳輿丹青九州禹蹟百郡秦并岳宗
岱禪主云亭鴈門紫塞雞田赤城昆

摩絳霄耽讀散市寓目囊箱易輜攸
畏屬身垣墻具饒浪飯適口充勝飽飯
宣宰級嚴糟糠親戚故舊老少異糧妾
御績紉侍巾幃房執扇圓絮銀燭熅煌
晝眠夕寐藍首烏牀弦歌酒燕接梧舉

觴矯手頓足悅豫且康嫡後嗣續祭祀蒸
嘗稽顙再拜悚息恐惶歲時開要願谷
審詳骸垢想浴執熱願涼驢騾犢特駭
躍超驤誅斬賊盜捕獲叛亡布朕遠允
稱琴阮嘯括筆論帟鈎巧任鈞釋紛利

碣石鉅野洞庭曠遠綿逸巖岫窅冥治
本於農務茲稼穡什載南而我菑黍稷
稅熟育新勸賞黜陟並斬敷素火魚乘
直庶然中庸勞謹謹勅聆音察理鑑貌
辨色貽厥嘉猷勉其祗植省躬淺誠

寵增抗極殆辱近恥林臯幸丁即兩疏
見機解組誰逼索居間處沈默寂寥求
古尋論散慮消搖欣奏累遣感謝歡招
渠荷的應園莽抽條枇杷晚翠梧桐早
凋陳根委翳羽落葉飄颻遊鶴獨運凌

俗竝佳皆妙毛施澍姿工頻早妍咲年矣每
催曦暉朗曜璿珠懸幹晦魄環照指薪
脩祐永綏吉訥短步引領俯仰廊廟束帶
矜莊細徘徊眦孤陋寡聞愚蒙等誦謂
語助者烏哉乎也

貞觀廿又一年二月八日臣褚遂良奉
勅書五十本

萬文韶刻字

褚遂良行書千字本解題

芳賀剛太郎

褚遂良畧傳

初唐の四大家の一人なる褚遂良は字を登善と云ひ杭州錢塘の人、散騎常侍亮の子である。博く文史に通じて隸書に最も巧みであると傳へられ、遂良の父の友歐陽詢が非常に彼を重んじたこと云ふ。太宗が曾つて侍中の魏徵に「虞世南が死んでからは、書を論ずる者が無い」と嘆せられると、魏徵は即座に褚遂良を推薦したので、太宗は早速召して侍書とされた。太宗は非常に王羲之の書を愛され、御府の金帛を出して天下の王蹟を購ふことを布告されると、世人は争ふて古書を獻じた。遂良は一々其の眞偽を辨じ且つ備に出づる所を論じて一として誤らなかつたと云ふ。官は中書令に拜せられ、高宗即位の後河南郡公に封せられ、出でて同州刺史と爲り、永徽三年吏部尚書に拜せられ、同中書門下三品となるも、永徽六年潭州都督に左遷され、更に顯慶二年桂州都督に轉じ、また愛州刺史に貶せられて官に卒した。

千字本の來歴

西晉の武帝が天下を統一した時、大夫の鍾繇が千字文を書いて武帝に奉つた。帝は大に之を嘉し、秘庫に收めて寶として居たが、西晉の末、懷帝の時、漢の劉聰に攻められて洛陽の都を出で丹陽に遷らんとした。其の途中は道險難で、劉

へ漢將石勒に追撃せられて車駕を馳らせた。偶々尋陽に遭ひ、車に載せて居た書箱は悉く塵埃して湮滅しようとした。千字文も此の厄に遭つたのであるが、其の後宋の武帝の時、其の絶滅せん事を懼れて、晉の書庫を開いて收拾し、王羲之に命じて塵埃せる千字文を磨寫させたが、晉韻は難はす讀み難い所が多かつた。其の後、梁の武帝の時に、殷鐵石に勅して鍾繇と王羲之の書中から重複しない一千の文字を選ばしめ、後に周興嗣をして韻の順序を整理し、一つの文章に編して、誦讀に便ならしめたものである。現行の千字文は即ち之である。鍾繇が千字文を作つてより二百四十年の後、漸く周興嗣の次韻によつて完成し、始て文教を裨益するに至つた。

さて我國に千字文の來たのは、應神天皇十六年、百濟の博士王仁が論語と共に貢進したのに始まる。應神天皇十六年は武帝即位二十一年に當り、周興嗣の次韻した時より二百二十三年前に屬するので、年代より推せば鍾繇の作であると思ねばならぬ。併し考證學者の中には、幾多の文獻を引用し、千字文は鍾繇の作であると官ふ事に對して疑問を挟んで居る者がある。

千字本の内容

千字文は四言の詩で、二百五十句から成立ち、隔句押韻(二句置きに韻を踏む)の詩形である。此の一千の文字中に天地間の事象を細大悉く網羅し、然も一字として重複した字は無いのである。其の巧妙なる技術は誠に稱讚に値する。太平廣記によれば、彼は一夕の間に次韻して、帝の御意にかなへたが、餘りに苦心したと見えて、一夜の中に鬢髮が悉く白くなつたと傳へられて居る。

褚遂良行書千字文講義

天地玄黃	宇宙洪荒	日月盈昃	辰宿列張
寒來暑往	秋收冬藏	閏餘成歲	律呂調陽
雲騰致雨	露結為霜	金生麗水	玉出崑岡
劍號巨闕	珠稱夜光	果珍李柰	菜重芥薑
海鹹河濟	鱗潛羽翔	龍師火帝	鳥官人皇
始制文字	乃服衣裳	推位讓國	有虞陶唐
弔民伐罪	周發商湯	坐朝問道	垂拱平章
愛育黎首	臣伏戎羌	遐邇壹體	率賓歸王
鳴鳳在樹	白駒食場	化被草木	賴及萬方
蓋此身髮	四大五常	恭惟鞠養	豈敢毀傷
女慕貞潔	男効才良	知過必改	得能莫忘
罔談彼短	靡恃己長	信使可覆	器欲難量
墨悲絲染	詩讚羔羊	景行維賢	剋念作聖

德建名立	禍因惡積	資父事君	臨深履薄	川流不息	篤初誠美	學優登仕	樂殊貴賤	外受傅訓	孔懷兄弟	仁慈隱惻	性靜情逸	堅持雅操	背邱面洛	岳寫禽獸	肆筵設席	右通廣內
形端表正	福緣善慶	曰嚴與敬	夙興溫清	淵澄取映	慎終宜令	攝職從政	禮別尊卑	入奉母儀	同氣連枝	造次弗離	心動神疲	好爵自縻	浮渭據涇	画彩仙靈	鼓瑟吹笙	左達承明
空谷傳聲	尺璧非寶	孝當竭力	似蘭斯馨	容止若思	榮業所基	存以甘棠	上和下睦	諸姑伯姊	交友投分	節義廉退	守真志滿	都邑華夏	宮殿盤鬱	丙舍傍啓	升階納陛	既集墳典
虛堂習聽	寸陰是競	忠則盡命	如松之盛	言辭安定	藉其無竟	去而益詠	夫唱婦隨	猶子比兒	切磨箴規	顧沛匪虧	逐物意移	東西二京	樓觀飛驚	甲帳對楹	矣轉疑星	亦聚羣英

杜稿鍾隸	漆書壁經	府羅將相	路夾槐柳
戶封八縣	家給千兵	高冠陪輦	駟轂振纓
世祿侈富	車駕肥輕	策功茂實	勒碑刻銘
確溪伊尹	佐時阿衡	奄宅曲阜	微且執營
桓公匡合	濟弱扶傾	綺迴漢惠	說感武丁
俊乂密勿	多士寔寧	管楚更霸	趙魏困橫
假途滅虢	踐土會盟	何遵約法	韓弊煩刑
起翦頗牧	用軍寂精	宣威沙漠	馳譽丹青
九州禹跡	百郡秦并	岳宗泰岱	禪主云亭
雁門紫塞	雞田赤城	昆池碣石	鉅野洞庭
曠遠綿迤	巖岫竄冥	治本於農	務茲稼穡
併載南畝	我菽黍稷	稅熟貢新	勸賞黜陟
孟軻敦素	史魚秉直	庶幾中庸	勞謙謹勅
聆音察理	鑑貌辨色	貽厥嘉猷	勉其祗植
省躬譏諷	寵增抗極	殆辱近耻	林阜幸即
兩疏見機	解組誰逼	索居閒處	沈默寂寥
求古尋論	散慮消搖	欣奏累遣	感激歡招

渠荷的歷	陳根委翳	耽讀氈市	具饌滄飯	親戚故舊	紈扇圓絮	絃歌酒燕	嫡後嗣續	陵牒簡要	驢驘犢特	布帛遼丸	釋紛利俗	年矢每催	指薪脩祜	束帶矜莊	謂語助者	貞觀廿又一年二月八日
圍莽抽條	落葉飄颻	寓目囊箱	適口充腸	老少異糧	銀燭煌煌	接栝舉觴	祭祀蒸嘗	顧答審詳	駭躍超驤	嵇琴阮嘯	竝皆佳妙	曦暉朗曜	永綏吉劭	個徘徊眺	焉哉乎也	褚遂良奉勅書五十字
枇杷晚翠	遊鸞獨運	易繪攸畏	飽飯宣辛	妾御績紡	晝眠夕寐	嬌手頓足	稽顙再拜	骸垢想浴	誅斬賊盜	括筆倫帚	毛施淋姿	璿璣懸幹	矩步引領	孤陋寡聞		萬文詔刻字
梧桐早凋	淩摩絳霄	屬耳垣墻	饑獻糟糠	侍巾幃房	藍荷象牀	悅豫且康	悚思恐惶	執熱願涼	捕獲叛亡	鈞巧任鈞	工壘妍咲	晦魄環照	俛仰廊廟	愚蒙等誚		

釋文及解義

○天地ハ玄黃、宇宙ハ洪荒。

天は玄く(赤味を帯びた黒)地は黄色である。上古の支那人は幽遠博大なる天地の色を斯の如くに觀たのである。宇は天地四方、宙は古往今來をいふ。洪荒は共に大の意。即ち天地四方は廣大にして過去現在未來と流轉窮まりが無い。

○日月ハ盈吳シ、辰宿ハ列張ス。

太陽は日中を過ぎると西に及び、月は十五日(陰曆)に至れば盈滿し、更に夫を過ぎると漸次虧けてゆく。辰宿(星座)は廣大無邊の天空に陳り張つて居る。

○寒來レバ暑往キ、秋收メ冬藏ス。

寒さ來れば暑さは去る。斯の如く四時の氣候は循環して限りが無い。温涼を言はざるは文を略す。穀物は秋に至つて收穫し、冬に至つて倉庫に貯藏す。春夏を言はざるは省文である。

○閏餘歲ヲ成シ、律呂陽ヲ調フ。

太陰曆に據れば一年は三百六十日也。實際は三百六十五日五時何分の總數有り。此の五日と五時何分とは四年目に約一月の日數が餘る。故に四年毎に閏

○龍師火帝、鳥官人皇。

伏羲氏の時、龍馬が圖を負うて出たので官に名附けて龍師と言つた。又燧人氏は民に火食を教へた、故に火帝と言ふ。少昊金天氏の時、瑞鳥の鳳凰が出たので鳥を以て官に記し鳥官と言つた。人皇とは三皇の一、人皇氏を言ふ。

○始メテ文字ヲ制シ、乃チ衣裳ヲ服ス。

文字なき上古は繩を結びて約束の印とした。黄帝の時、蒼頡が鳥の足跡にヒントを得て始めて文字を制作した。又黄帝の時、其の臣胡曹が衣裳(着物)を作り、人は皆之を着る様になつた。

○位ヲ推シ國ヲ讓リシハ、有虞・陶唐。

聖人出でて君の位を推し、賢者に國を讓つて世を治めしめた。即ち堯は舜を推し、舜は禹を擧げて是に讓つた。有虞は舜の氏、陶唐は堯の氏。

○民ヲ弔シ罪ヲ伐チシハ、周ノ發・商ノ湯。

暴虐の君を伐ち人民の苦を救ひ慰め安んじた。即ち周の武王(名は發)は殷の紂王を伐ち、殷の湯王は夏の桀王を討ち、共に人民を安らかにした。【初め商と號し、後殷と改む。商を高に作るは詛形なり。】

○朝ニ坐シテ道ヲ問ヒ、垂拱シテ平章ニス。

右の仁君は朝廷に在りて治國の大道を臣下に問ひ詰つて然る後政治を行はれた。故に衣を垂れ手を拱いて(勞せずして自然に)天下は正しく章かに治ま

月を設け、年月を整理し歲を定めたのである。律とは陽の音、呂とは陰の音を言ふ、音樂の意。即ち音樂は季節に刺り當てて陰陽の氣を調べる。陽を言ひて陰を言はざるは陽中に含めたのである。

○雲騰リテ雨ヲ致シ、露結ビテ霜ト爲ル。

地上の水氣は空に升りて雲となり冷氣にあへば雨となり地上に降る。氣候が寒冷になれば空中の水氣は露となり更に寒氣にあへば凝結して霜となる。

○金ハ麗水ヨリ生ジ、玉ハ崑岡ヨリ出ヅ。

昔、麗水と言ふ河より天下の寶である沙金が出で、又美しき寶石が崑崙山より産出したと言ふ事である。

○劍ハ巨闕ト號シ、珠ハ夜光ト稱ス。

昔、越國の名劍は巨闕と言つて名高く、又隋侯の時得た世にも稀なる眞珠は夜光と言ひ、歷世之を稱へた。

○果ハ李奈ヲ珍トシ、菜ハ芥薑ヲ重シズ。

果物の中に於ては、李と奈が最も珍重され、野菜は芥と薑(生姜)が殊に重んぜられる。

○海ハ鹹ニ河ハ澹ニ、鱗ハ潜ミ羽ハ翔ル。

海水は鹽からく、河水は淡泊で鹽氣を含まぬ。魚は淵にひそみかくれて棲息し、鳥は大空を棲家として自由に飛び翔つて居る。

○黎首ヲ愛育シ、戎羌ヲ臣伏セシム。

黎首は人民を言ふ。人君の世を治め給ふや、萬民を愛しみ育み玉ふ。戎羌は西方の野蠻人種を言ふ。即ち野蠻の國々迄君の德澤を慕ひ臣下となりて伏従するに至るのである。

○遐邇ハ體ヲ壹ニシ、率賓シテ王ニ歸ス。

遐邇は遠近に同じ。遠き野蠻國と近き中國の隔てなく、仁君の之を視る事恰も一身の如く一様に徳を被るのである。即ち一視同仁である。率は倍也、服は責也。されば民人は相偕に王化に歸服す。

○鳴鳳ハ樹ニ在リ、白駒ハ場ニ食ス。

天下泰平の瑞兆として鳳凰梧桐の樹に來りて鳴き、又白き駒(小馬)は出でて牧場に草を食ふに至る。

○化ハ草木ニ被リ、賴ハ萬方ニ及ブ。

惠澤更に草木に被り、其の賴(恩惠)は萬方(天地間の萬物)に迄普く及ぶ。蓋シ此ノ身髮ハ、四大五常。

思ふに此の身體髮膚は父母の賜なれば、常に大切にしなければならぬ。併し乍ら四大(地水火風)によつて身體の出來た事を考へ、良く五常(仁義禮智信)の道を守つて、身を立てねばならぬ。

○恭シク鞠養ヲ惟ヒ、豈ニ敢テ毀傷センヤ。

夫故誦んで我身を鞠み養ひし父母の鴻恩を思はば、どうして此の身を傷けやぶる様な行があつてよからうか。毀傷せざるは實に孝道の始である。

○女ハ貞潔ヲ慕ヒ、男ハ才良ニ効フ。

凡そ婦人は貞操と潔白とを慕ひ愛して、婦人の美德を養ふに心懸け、男子は才能の有る人善良なる人を手本とし、自ら才徳ある人となつて世に立つ事を期せねばならぬ。【潔は正。潔は俗。潔も亦俗。潔に作るは非なり。】

○過ヲ知リテハ必ズ改メ、能ヲ得テハ忘ル、莫レ。

何人と雖も過失は有る、若し過つたならば速かに改めて同じ過を二度繰返さぬ様に心すべきである。

○彼ガ短ヲ談ズル罔レ、己ガ長ヲ恃ム靡レ。

他人の短所を知つても感に言ひ觸らす事は戒しめねばならぬ。又己の長所とする所があつても鼻にかけて人に自慢してはならぬ。

○信ハ覆ム可ラシメ、器ハ量リ難キヲ欲ス。

人と約束せし事は信實を守り、必ず其の言の通りに實行する様にさせなくてはならぬ。才能度量は廣大にして人に見透されてはならぬ。度量が廣ければ人の尊敬を受けるものである。

○墨ハ絲ノ染ルヲ悲ミ、詩ハ羔羊ヲ讚メタリ。

墨子は白絲の蒼や黄に染まるを見て悲んだ。蓋し人の性は善良なる事白絲の如く、友の善惡により絲の染まるが如く善不善の別を生ずるものである。又詩經の召南羔羊の章に、召南國は周の文王の徳に化し極めて質素儉約であつた事をほめて居る。【墨は罪に同じ。墨を正とす。】

○景行ハ維レ賢ナリ、烈ク念ヘバ聖ト作ル。

景行の高き人は賢者として後世迄も其の名を傳ふ。されば古の聖人の言行を念ひ考へて努めたならば、其の人も亦聖人の域に達する事が出来よう。【烈は克に通ず。】

○徳立テバ名立チ、形端シケレバ表正シ。

道を修め徳が外に顯るゝ様になれば、隨つて名が著れて永遠に傳はる。形は容姿、表は影、威嚴。容姿が正しければ威嚴も自ら備はりおごそかに端正となる。

○空谷ハ聲ヲ傳ヘ、虛堂ハ聽ヲ習ヌ。

例へば淋しき谷間で聲を出すすと反響して其の聲を傳へる。又静な大きな室で音を發すると其の響は繰返して聴く者の耳に反響する。蓋し人の行爲は善惡によつて應報あるに喩ふ。

○禍ハ惡ノ積ムニ因リ、福ハ善ノ慶ニ縁ル。

禍は自ら惡事を積んだ結果として來る事を思ひ、幸福は善事を行つた賜であ

る事を考へ、努めて善行は爲すべきものである。

○尺璧ハ寶ニ非ズ、寸陰ハ是レ競ヘ。

直径一尺の玉は世に稀なるものではあるが、未だ以て眞の寶とは言へぬ。一寸の光陰をも惜んで勉勵し天下の人材となる事こそ眞の寶と言へよう。

○父ニ資リテ君ニ事フ、曰ク嚴ト敬ト。

父母に奉仕する心を取り移して君に仕へるを忠臣と言ふ。さて君父に事へる方法は嚴の心と敬の心とより外には無い。【与は與に同じ。】

○孝ハ當ニ力ヲ竭スベシ、忠ハ則チ命ヲ盡セ。

孝とは子たる者全力を盡して父母に奉仕し安心を與へる事ではなくてはならぬ。忠の道は己の身命を賭して君に仕へる事ではなくてはならぬ。

○深キニ臨ミテ薄キヲ履ミ、夙ニ興キテ温清ス。

孝の道を盡すには、恰も深き淵に臨むが如く、薄き氷を履む時の如く、注意深く慎んで行ひ、又朝早く起き夜は遅く迄努め、朝夕必ず父母の安否を問ひ、冬は暖く夏は涼しくして孝養をなすべきである。

○蘭ノ斯レ馨キニ似、松ノ盛ナルガ如シ。

孝子の父母に仕へ忠臣の君に仕へるのは、恰も蘭が幽谷に生えて芳しき香を放つ様に、其の美名は天下に廣まり、又松の常に緑を呈し枝葉の繁盛なるが如く、其の徳は盛にして人皆敬慕するに至るものである。

○川ハ流レテ息マズ、淵ハ澄ミテ嘆ヲ取ル。

孝道は川の流れて停滯する時の無い様に終生怠つてはならぬ。又淵の水が澄んで萬物の影を寫す様に心からの誠を盡して事ふべきである。

○容止ハ思フガ如ク、言辭ハ安定ニス。

人は容貌舉止の優美な事を思ふ。けれ共唯思ふだけではいけない、其の思ふと同時に姿勢動作も正しく優美でなくてはならぬ。言葉は落著いて重々しく輕率であつてはならぬ。【辭を正とし又辭に作る。辭は別體。後世混用す。】

○初メニ篤キハ誠ニ美ナリ、終ヲ慎メバ宜ク令カルベシ。

凡そ事は最初にあたりて篤く留意すれば誠に立派に成就するであらう。更に終りをも慎んで鄭重にすれば必ずよい結果を得るものである。

○營業ノ基ク所 籍甚覺無シ。

前述の如く行を正しくする時は、他日官途に就き榮達する基となるものである。行正しければ、其の名聲は永遠に傳へられるものである。

○學優ニシテ仕ニ登リ、職ヲ攝リテ政ニ從フ。

學問の業にまさつた人は他日文官試験に及第して官途に仕ふるを得、且つ重要なる職務を執り國政に従ふ地位に登る事が出来る。【職は職の俗字。】

○存スルニ甘棠ヲ以テシ、去ツテ益々詠ゼラル。

世に生存して居る間は、周の召公が南國を巡行し甘棠の下にて政を聽き、人

民は其の徳澤に浴したるが如く、死後は召公の南園を去つて、然も人々之を思慕し、嘗て宿られた甘棠の樹を伐らず無窮に其の徳を傳へたるが如くに益々歌はれなくてはならぬ。

○樂ハ貴賤ヲ殊ニシ、禮ハ尊卑ヲ別ツ。

音樂は上天子より下庶人に至る迄皆其の分に應じて區別がある。禮も亦上下貴賤の別が整然として居る。禮樂は並び行はれて風俗を敦厚ならしめるものである。

○上和ギ下睦ビ、夫唱ヘ婦隨フ。

君は臣を愛し臣は君を敬し、上下君臣和睦睦びて天下泰平となる。又一家内に在りては婦人は夫の意見に従ひ、夫婦相和すべきである。

○外ニハ傳訓ヲ受ケ、入リテハ母儀ヲ奉ズ。

男子郷黨に出でては師(傳)の教訓を守り、女子家庭内に在りては母の教訓を奉じて之に遵ふべきである。

○諸姑伯叔、猶子ハ兒ニ比ス。

諸は衆なり、父の姉妹を姑と言ひ父の兄を伯と言ひ父の弟を叔と言ふ。是等は共に親密を圖る可きである。禮記に「兄弟は猶ほ子の如し」と見ゆ。即ち「タイ、マイ」は我子同様に可愛がらねばならぬ。【井は叔の俗字。】

○孔ダ兄弟ヲ懐ヘ、氣ヲ同ウシ枝ヲ連ヌ。

孔は親密を圖る可きである。禮記に「兄弟は猶ほ子の如し」と見ゆ。即ち「タイ、マイ」は我子同様に可愛がらねばならぬ。【井は叔の俗字。】

○堅ク雅操ヲ持スレバ、好爵自ラ糜ガル。

人は堅く正しき操を保ちてゆけば、世人に認められ自然に立派な官爵にありつく事が出来る。雅は正なり。

○都邑ノ華夏、東西ノ二京。

都城の在る所を都邑と言ふ。華夏は文化の中心たる廣大なる國土の意。華は盛也、夏は大也、天子の徳盛にして都邑は廣大に繁華なるを言ふのである。京は都也、東の都を洛陽、西の都を長安と言ふ。【京は京の筆寫體。】

○邙ヲ背ニシ洛ニ面シ、渭ニ浮ビ涇ニ據ル。

洛陽は邙山を後に控え、洛水に臨む。長安は渭水に面し、涇水に添ふ。共に地の利を占めた都城である。【邙又芒に作る。智水千文は芒に従ふ。】

○宮殿ハ盛鬱トシ、樓觀ハ飛ブカト驚ク。

二京に在る宮殿は盛鬱として、めぐりめぐつて樹木の繁盛なるが如く、樓觀(高樓、展望臺)は雲表に聳え、鳥の空中に飛ぶかと思はせる程で、人皆駭いて眺めた。【盛は盤の筆寫體。鬱は正體、鬱は通じて用ふ。鬱鬱は俗體。】

○禽獸ヲ圖寫シ、仙靈ヲ画彩ス。

又宮殿の楹などは鳥獸の形を彫刻して模倣とし、楹等には仙人神靈の像を畫いて彩色してある。【圖は正體、畫は非なり。畫は正體、画は俗なり。】

兄弟は特に親愛にせねばならぬ。言ふ迄もなく、同じく父母の精氣を受けて生れた者である。樹木には數多の枝葉が連り生ずれども其の幹は一なるが如く一心同體である。故に互に友愛の情を以て助け合はなくてはならぬ。

○友ニ交ルニ分ニ投ジ、切磨箴規セヨ。

友達と交際するには其の分に應じて互に其の心の合ふ者を探ふ可きである。斯して互に勵し合ひ、又言行に間違なきやう戒め正さなくてはならぬ。

○仁慈隱惻ハ、造次モ離レズ。

凡そ人は仁慈の心を持ち、他人の艱難を見ては同情の心がなければならぬ。造次(東の間)も仁慈惻隱の心に背き離れてはならぬ。【離は離の俗。】

○節義廉退ハ、顛沛モ虧ケズ。

節操、正義、廉潔、謙退の四徳は常に心に有し、顛沛(顛倒)の假借、僅の間も缺く事があつてはならぬ。

○性靜ナレバ情ハ逸ク、心動ケバ神疲ル。

心の落著たる時は、其の感情も亦自然に安らかになる。之に反して心の動揺する時は、其の行も輕率となり随つて精神も疲勞し、是非善惡の判断を失ふものである。

○眞ヲ守レバ志ハ滿チ、物ヲ逐ヘバ意ハ移ル。

人の行ふ可き誠の道を守つて失ふ事なければ其の心は満足し、外物(聲色嗜

○丙舍ハ傍ニ啓ケ、甲張ハ楹ニ對ス。

丙舍(宮殿内に在る家)の門は傍より開け其處から互に往來する事が出来、甲張(とばり)は金玉を以て裝飾せる楹に對して居る。誠に輪奐の美を極む。

○筵ヲ肆キ席ヲ設ケ、瑟ヲ鼓シ笙ヲ吹ク。

宮殿内に於て儀式ある時は敷物を布いて宴席を作り羣臣に宴を賜はる。其の時は大琴を弾じ笙を吹いて興を添へるのである。

○階ニ升リ陸ニ納ル。夙轉ズレバ星カト疑フ。

文武百官は階段を升り陸を上つて參内す。悉く分に應じ冠を飾るに寶玉を以てしたるが故に、其の冠の動き輝く様は星の輝けるかと疑ふ程の壯觀さである。【井は俗、又夙に作る。井を正とす。】

○右ハ廣内ニ通ジ、左ハ承明ニ達ス。

右は廣内殿に通じ、左は承明殿に到る。斯の如く玉城は廣大である。東を左とし、西を右となす。

○既ニ墳典ヲ集メ、亦羣英ヲ聚ム。

宮殿内の圖書室には三墳五典等の古代の書に至る迄悉く集め、更に天下の賢者を集めて書を読み學を講じ文學甚だ盛である。【羣は群に同じ。】

○杜ノ稿、鍾ノ隸、漆ノ書、壁ノ經。

漢の杜度の草書、魏の鍾繇の隸書(今の楷書を言ふ)、漢の靈帝が嵩山の石窟

より得たと云ふ漆で書いた書、魯の共王の孔壁より得た經書に至る迄收蔵されて居る。▲稿は神稿。文稿は多く草書を用ふ、故に草書を稿と言ふ。

○府ニハ將相ヲ羅ネ、路ニハ槐卿ヲ夾ム。

政府には大將、宰相を始とし文武百官列び連りて政を執り、京師の道には大臣の車馬が立ち列んで居る。槐卿とは周の時、府に三株の槐樹を植ゑ三公(大臣)の座とした故事から出てる。【夾は正、俛に作るは借、夾は俗體。】

○戸ニハ八縣ヲ封ジ、家ニハ千兵ヲ給ス。

勳功のある臣の家には八縣の廣さの地を與へて其の勞を儲ひ、將相公卿の家には千人の兵を與へて護衛させ、其の權威を保たしめた。

○高冠ハ鞞ニ陪ヒ、穀ヲ驅リテ糞ヲ振フ。

高位高官の人々は盛裝して天下の風氣の前後に侍り、穀穀を走らせ冠の紐を動かして乍ら揚々として御供をなす。【鞞は俗、驅を正とす。】

○世祿修富シ、車駕肥輕ナリ。

公卿將相の子孫は父祖代々の祿を繼承する爲、家は富み榮えて修を極む。夫故出入には肥馬に駕し輕車に乗る。

○功ヲ築スル茂實ナレバ、碑ニ勒シ銘ヲ刻ス。

勳功を立てる人々が盛に多く現れて來れば、生前の功を碑に刻して後世に傳へ、其の名前を刻して褒め稱へるのである。【築は策の俗字。】

材)に頼み天下は實に安寧である。

○晉楚更霸タリ、趙魏ハ横ニ困シム。

周末戰國の世は天下靡の如く亂れた。晉と楚とは争を續け代はる代はる諸侯の長となつた。趙と魏とは合縱として六國が縱に同盟して秦に當らんとする蘇秦の策を講じたが、反つて秦の横(連横)とも連衡とも言ふ。六國を秦に服せしめんとした張儀の説)の計に苦められ、遂に秦の爲に併吞された。

○途ヲ假リテ執ヲ減シ、踐土ニ會盟ス。

晉の獻公は魏を伐たんとして途中に在る虞國を通して貫ひ魏を滅す事を得た。凱旋する時、亂暴にも虞國を亡して了つた。又晉の文公は踐土(地名)に諸侯を會合し周室に仕へん事を契約した。

○何ハ約法ニ遵ヒ、韓ハ煩刑ニ弊ス。

趙何は漢の高祖を輔け秦を平定し煩雜なる法律を凡て三章に約めたので國はよく治つた。之より前、韓非子は秦の爲に苛法を設けた爲、人民は其の煩に苦み却つて國は疲弊し、遂に漢に亡された。

○起蕭頗牧ハ、軍ヲ用フル寂モ精シ。

白起・王翳は共に秦の良將、廉頗・李牧は共に趙の良將なり。以上の四將軍は用兵に精通し、戦へば必ず勝ち攻むれば必ず取り、天下の諸侯は恐をなした。【策は最の筆寫體。】

○籀漢伊尹、時ヲ佐クル阿衡タリ。

籀漢(地名)に釣した太公望は周の文王を輔け、阿衡(總理大臣)になつた伊尹は殷の湯王を佐け、共に暴君を亡して時の人民の苦を救ひ泰平を致した賢者である。

○奄ニ曲阜ニ宅ス、且微リセバ執カ營マン。

周公旦は武王を輔け殷の紂王を伐ち、曲阜に大なる宮殿を營み周室の基を作つた。若し周公旦が無かつたならば、誰かよく此の大事業を經營する事が出来ようか、蓋し周公の功は偉大である。

○桓公ハ匡合シ、弱キヲ濟ヒ傾ケルヲ扶ク。

齊の桓公は天下の亂を匡し諸侯を統一して自ら旗頭となり、弱き國は救ひ危き國は輔けた。桓公の治績の偉大なるを言ふ。

○綺ハ漢惠ヲ廻シ、説ハ武丁ヲ感ゼシム。

漢の惠帝が未だ太子であつた時、其の位を廢せられんとしたので綺里季は力を盡して太子の位に回した。又殷の傳説は武丁が嘗て夢に感じて捜し求めた賢人で、後に大臣として政を任せられた。【廻は回と同じ。説は説の俗體。】

○俊父ハ密勿シ、多士ハ寔ニ寧シ。

俊父(俊は千人中の英を言ひ、百人中の英を又と言ふ、賢者の事)は密勿(勉と音通、勉勵の意)して政治に參與し以て君を輔け、君は多士(多くの人材)に畫かれ、後世永く傳へられた。

○威ヲ沙漢ニ宣ベ、譽ヲ丹青ニ馳ス。

前述の四將軍は威名を遠き沙漢地方に迄宣揚し、又其の名譽は天下に輝き、繪畫に畫かれ、後世永く傳へられた。

○九州ハ禹ノ跡、百郡ハ秦ノ并。

九州(古の支那本土)は夏の禹王の立てし所で、皆其の足跡の至りし處である。秦の始皇は天下を統一し、漢に至つて國を百郡に分けた。即ち漢の百郡は秦の併有したものを斥す。

○岳ハ泰岱ヲ宗トシ、禪ハ云亭ヲ主トス。

山は泰山と岱山とを尊ぶ。禪は封禪なり。封は天の祭、禪は地の祭。即ち封禪には云々山、亭々山とに依つたのである。【嶽は岳の古字。泰恒同じ。】

○雁門、紫塞、雞田、赤城、昆池、碣石、鉅野、洞庭。

雁門は岱山。紫塞は萬里の長城。雞田は古の驛名。赤城は周時の關所。昆池は池名、今の昆明池。碣石は山名。鉅野は澤名。洞庭は湖名。

○曠遠綿邈トシテ、巖岫ハ宵冥タリ。

以上は何れも國土の中に在りて廣く遠く邈に連り、千古に亘りて窮まり無きのみならず、山中には石室ありて奥深く山穴ありて幽かに遠く測り知られぬ程である。【曠を正とし、巖・邈・遠は俗體なり。宵又香に作る。】

○治ハ農ニ本ヅク、務メテ茲ニ稼穡セヨ。

治國の根本義は農を務むるに在る。故に稼穡（稼は作物の植付、穡は刈入、農事を言ふ）には力を専らにせねばならぬ。

○併メテ南畝ニ載トシ、我ハ黍稷ヲ執ウ。

陽氣の盛んな南方の田畝より耕作を始め、我は黍（モチキビ）稷（ウルキビ）等の種子を蒔き農務に勤むのである。【併は假の俗。執を正とし、藪は別體、藝は通じて用ひ、又藪に作る。】

○熟ヲ税トシ新ヲ貢トシ、勸賞黜陟ス。

成熟したる穀物は租税とし、初物は貢として上納し、貢税の滞り無き時は上より賞を與へ、監督官には勤怠により或は官爵を授け或は退けるのである。

○孟柯ハ敦素、史魚ハ秉直。

孟子は性質の素直な賢人であり、衛の大夫子魚（史は官名）は曲つた事の嫌な正しい人であつた。

○中庸ヲ庶幾シ、勞謙謹勸ス。

中正穩健の道に近からん事を希ひ、飽迄人に謙り、言行を慎み心正しくせねばならぬ。【勸は勸の俗字。勸は勸に通じ用ふ。】

○音ヲ聆キテ理ヲ察シ、貌ヲ鑑ミテ色ヲ辨ズ。

人の言を聞けば道理を観察し、人の容貌を観ては顔色（喜怒哀樂の情）を辨別す。即ちよく是非善惡を見分ける事。【辨は辨を正とし、又辨に作る。】

古書を読み古道を尋ね論じ、思慮を散じて思ふ存分に樂を極めた。

○欣奏ミ果遣リ、感歎キ歎招ク。

斯の如くなれば、心中は自ら欣喜の情に満ち、世の累はしき事は去り、又悲憂はいつしか退き、喜びは來りて心を樂ましめる。【謝を歎に作るは本字。】

○渠荷ハ的歴タリ、園莽ハ條ヲ抽ゾズ。

溝の中に咲いた蓮華も、鮮に麗しく、園に生える雜草も枝の伸びた時は青々として清いものである。【條は條の筆寫體。】

○枇杷ハ晚翠ニ、梧桐ハ早凋ス。

枇杷の樹は冬になつても遅く迄其の葉は落ちず青々として居るが、彼の梧桐は秋になれば其の葉は早く萎みて落ちて了ふものである。

○陳根ハ委積シ、落葉ハ飄颻ス。

古き根は湖みなへ、落葉は風に翻り散るものである。以上の數句は暗に人生の榮枯盛衰を敘べた。

○遊鶴ハ獨リ運リテ、絳霄ヲ凌摩ス。

鶴と言ふ大鳥は獨り天空を飛翔し、夕燒空を凌いで翔り廻る。隱者の境地に喩ふ。【鶴は正體、鶴に作るは俗體。凌は凌の誤。】

○耽讀シテ市ニ販ビ、目ヲ囊箱ニ寓ス。

漢の王充は勉強家であつたが、貧にして書を買ふ能はず、故に洛陽の町に出

○厥ノ嘉猷ヲ貽シテ、其ノ祗植ニ勉メヨ。

君子は子孫に迄よき道を遺し、更に人の人たる道を祇み敬ひ、身を立て家を興す様に努力せねばならぬ。

○躬ヲ省ミテ謙誠シ、寵増セバ抗極ル。

君子は自ら反省して不善の身に及ばさぬ様に戒めねばならぬ。君の寵愛が増せば小人の嫉妬を受け遂に讒言にあふ、之れ天下の通弊で、已むを得ない。

○辱ニ殆ク耻ニ近ヅク、林臯ニ即クコトヲ幸ヘ。

君の寵愛を受ける時は小人の嫉妬を招き、一生をあやまる事が無いとも限らぬ。夫故兆候が見えたならば速に林臯（野外、山林）に即く事を願ひ、隱遁して禍を避く可きである。【臯を正となす。卑・卑・卑は俗。】

○兩疎ハ機ヲ見テ、組ヲ解キタレバ誰カ過ラン。

漢の疏廣、疏受と言ふ父子の賢人があつた。父の廣は是るを知れば殆からず以て長久なる可しと言ひ、子の受は功成り名遂げて身退くは天の道也と言ひ、共に官を辭したので人皆其の賢なるを褒めた。逼は逼迫なり。即ち誰か斯く逼迫して然らしめんやと言ふ事で、機を見る事の敏なるを稱したのである。

○居ヲ閑處ニ索メ、沈黙ヲ守リ深ク。

斯くて住居を閑靜の地に卜し、沈黙を守り深く謹み、一生靜に天命を樂んだ。

○古ヲ求メテ尋論シ、虛ヲ散ジテ消搖ス。

古を求めて尋論し、虚を散じて消搖す。

でて立ち讀みしたと言ふ。斯の如く自ら書物に目を注ぎ専ら文學に勤むるを

○易翰ハ畏ル、攸、耳ヲ垣墻ニ屬ス。

輕率に物を取扱ふ事を畏れ慎み、垣壁に耳が有ると心得て、人無き所と雖も言行は慎まねばならぬ。

○儲ヲ具ヘ飯ヲ滄フ、口ニ適ヒ腸ニ充ツ。

食事の際は必ず膳を供へ禮義正しく飯を食ひ、只口に適ひ腹のふくれる程度に粗食で満足し贅澤は避く可きである。【儲又膳に作る。滄・滄・餐は同意。】

○飽キテハ直宰ニ飯キ、饑エテハ糶糶ニ厭ク。

粗食でも満腹の時は如何なる好物の料理も直ぐ食ひ厭きて了ふ。飢えた時は糟や糠の如き粗食をも厭く迄むさばり食ふものである。

○親戚故舊、老少ハ糶糶異ニス。

親類や昔からの知人は貴賤貧富の別なく親密を圖るべきである。老人と少年とは食物も自ら分を異にす、老人には老人に適したものを薦む可きものである。

○妾ハ績紡ヲ御シ、侍ハ韓房ニ巾ス。

妾は絲をつむぐ事を取扱ひ、侍女は韓や房などを掃除するのが其の役目である。

○執扇ハ圓梨ニシテ、銀燭ハ煌煌タリ。

扇張りの扇子は圓く清らかにして夏は涼を入れるに用ひるものである。銀の燭臺は輝く即ち扇の色が銀の如く白く輝くに喩ふ（「理髮好の詩に見ゆ」）。

○晝ハ眠リ夕ニ寐ヌ、藍菊象牀。

晝でも睡眠を催うすれば眠り、夜眠ければ寝ぬ（邊詔の故事）。青竹製の寝臺書でも睡眠を催うすれば眠り、夜眠ければ寝ぬ（孟嘗君の故事に見ゆ）。【菊を正とし又は象牙の寝床を用ひて安らかに寝ぬ（孟嘗君の故事に見ゆ）。【菊を正とし笋・菊は俗とす。菊に作るは詭形なり。牀は正體、床は俗なり。】

○絃歌酒燕、梧ヲ接ヘ鵲ヲ舉グ。

音楽を奏して歌詩を唱へ、宴會を聞く。其の席上の人々は互に杯を交へ、鵲を擧げて酒を酌み交し、朝に遊び興するのである。【燕は正、醜・燕に作るは俗。梧は杯と同意、盃に作るは非なり。】

○嬌手頓足シ、悅豫ニシテ且康ナリ。

宴會の席上では手を擧げたり足すりしたり、種々な手振り身振りで愉快に踊る。夫故心中は悦び舞し其の上安である。以上數句は貴人の生活状態を叙べたのである。

○嫡後嗣續シ、祭祀蒸嘗ス。

正妻の長子は父の後繼者として一家を相續する。故に祖先に對し蒸（冬の祭）嘗（秋の祭）を怠らす行はなくてはならぬ。

○粉ヲ釋キ俗ヲ利ス、竝ニ皆佳妙ナリ。

以上の八人は共に亂れた事物を理め解いて世人に利便を興へた。一藝の奥儀を極め絶妙の境地に達した人々である。

○毛施ハ洪姿ニシテ、工翠妍咲ス。

呉の毛施や越の西施は共に姿貌の優れた代表的美人であつた。西施の眉をわめて憫む姿の艶さと言ひ、毛施の笑を含んだ媚さと言ひ、萬人をして齊しく悦ばせしめたと言ふ【翠は正、妍は俗。咲は笑に同じ、又咲に作る。】

○年矢毎ニ催シ、曠暉朗耀タリ。

年月のたつのは矢よりも速く、時々刻々に移り往つて、再び還り来らぬものである。【曠（日光）は照り輝き、暉（月光）は下界を照破し、萬類齊しく其の恵を享く。【曠は正、曠は俗。】（智永千文に略となすは誤なり）】

○璿璣懸斡シ、晦魄環照ス。

璿璣（天文觀測器）を以て天の運行（懸斡）を觀測して、月の晦朔の推移循環して照り輝く事を知ると言ふ意。【璿は正體、借りて旋に作る。】

○薪ヲ指シテ、粘ヲ脩ム、氷綏吉劬ナリ。

薪の燃えて盡きざる様に、道を脩むれば其の身に幸が来るものである。幸福

○稽顙再拜シテ、悚思恐惶ス。

祭を行ふ際は稽顙（ぬかづく）の禮をなし、再拜の禮をなし、悚み懼れ恐れ惶むの態度を持すべきである。【懼は正、思は俗。】

○賸牒ハ簡要ニシ、顧客ハ審詳ニス。

文書は簡單に要領を得る様になし、返答の文には詳細に認め禮を失はぬ様に努めねばならぬ。

○骸垢ケバ浴センコトヲ思ヒ、熱ニ執レバ涼シカラシコトヲ願フ。

身體に垢が附けば入浴して清潔にしようと思へ、暑に蔽れる時は涼氣を求めたいと願ふ。これ人情の然らしむる所である。【涼は涼の筆寫體。】

○驢驘續特ハ、駭躍超驥ス。

驢（ウサギウマ）、驘（小馬）、續（特）、特（豕の兒）等の家畜は牧場を駭き、躍り、超え、驕ると云ふ様にして自由に遊び戯れて居るものである。

○賊盜ヲ誅斬シ、叛亡ヲ捕獲ス。

人を賊ひ物を盜む惡黨を斬り殺し、又謀反人や逃亡者は捕へて刑罰に處す。

○布ノ敷、遼ノ丸、梧ノ琴、阮ノ嘯。

呂布の弓術、遼の玉術、梧の夜の彈琴法、阮嗣宗の詩吟法等は何れも其の道の達人であつた。【射又阮に作る。敷は本字なり。】

○括ノ筆、倫ノ番、鈞ノ巧、任ノ釣。

を得て水く緩なれば、心も楽しく、喜んで務に用する事が出来る。勤はつとむ意。

○矩歩引領シテ、廊廟ニ俛仰ス。

道を歩むには法に叶ふ様になし、頭を上げ姿勢を正しくし、表御殿に出入する時は、俛いたり仰いだりして敬意を表はし、慎みて禮を守るべきものである。【俛は正、俯は俗。】

○東帶矜莊ニシテ、個排瞻眺ス。

東帶は禮服の事、禮服用の際には、其の容儀を矜莊（謹み嚴）にせねばならぬ。個排は往きつ戻りつする事。瞻眺は望みみる事。從容たる態度を言つたのである。【斐を正となす、排・排は俗。個・個は俗、正體は回なり。】

○孤陋寡聞ナレバ、愚蒙ト謂テ等シウス。

凡そ學問は師に就き見聞を廣む可きであつて、獨學では見聞も狭く智識も亦淺い。故に無智文盲の輩と同じく人の諒を受けるとの意。

○語助ト謂フ者ハ、焉哉乎也ナリ。

漢文の所謂置き字の中では、最も多く焉・哉・乎・也が使用される。

402
447

目書帖法版社文興

漢碑集	定價一圓五十錢	送六錢
禮器碑	定價一圓五十錢	送六錢
(北魏) 鄭道昭碑下碑	定價一圓六十錢	送十錢
(北魏) 造像記集・張猛龍碑	定價三圓二十錢	送十四錢
歷代帝王名臣法帖集(二卷)	定價六圓四十錢	送廿二錢
王羲之全集	定價七十錢	送六錢
王羲之十七帖	定價八十錢	送十錢
關亭叙・興福寺斷碑・般若心經	定價一圓五十錢	送十錢
王獻之全集	定價一圓八十錢	送十錢
唐太宗全集	定價一圓五十錢	送十錢
唐世宗全集	定價一圓五十錢	送十錢
歐陽詢全集	定價一圓五十錢	送十錢
歐陽詢九成宮醴泉銘	定價一圓	送六錢
褚遂良全集	定價三圓	送十四錢
褚遂良孟法師碑	定價四圓	送十四錢
精河南行書千文	定價五十錢	送六錢
孫過庭書譜	定價一圓七十錢	送十錢
顏真卿全集	定價八圓七十錢	送三十錢
顏真卿大字麻姑仙壇記	定價五十錢	送十錢
柳公權全集	定價一圓二十錢	送十錢
蘇東坡集	定價一圓六十錢	送十錢
趙子昂集	定價三圓三十錢	送十四錢

精河南 行書千文
定價金四十錢

昭和十六年二月一日印刷
昭和十六年二月十日發行

編輯者 株式興文社
發行者 株式興文社

代表者 石川寅吉
東京市日本橋區馬場町二丁目二番地

印刷者 單式印刷株式會社
代表者 森下笑吉
東京市芝區芝一丁目三番地

發行所 株式興文社
東京市日本橋區馬場町二丁目二番地
電話 東京一〇八八・一〇八九・一〇九〇
花菱電話 一〇八一・一〇八二・一〇八三

終

